区民かわら版

ふれあい“やましな”2007区民ふれあい文化祭

区民ギャラリー受賞者決定

2月に開催された区民ふれあい文化祭の「区民ギャラリー」に出展された作品265点の中から、各部門の「ふれあいやましな賞」受賞作品（最優秀作品）を紹介します。

問合せ先
ふれあい“やましな”実行委員会事務局：区まちづくり推進課（☎592-3088）

写真

西沢五郎さん「花嫁さん」

書道

▶一般の部
金丸修さん「漢詩」

▲小学生・中学生の部
音羽中学校3年生
宮崎萌子さん

絵画

一般の部

篠田眞翠美さん「木霊」

小学生・中学生の部

山科中学校3年生
八木若菜さん
「京都市美術館」

保育園・幼稚園の部

すみれ幼稚園　渡邊夕葵さん「マンドリル」

リサイクルアート

角谷久子さん「スタンド」

陶芸

八島有可子さん

美化推進条例施行10周年

「山科区2万人まち美化作戦」に特別感謝状

この程、市美化推進条例施行10周年を記念して、特別感謝状が「山科区2万人まち美化作戦」など、行政区を挙げて一斉清掃を行い、地域の環境美化と市民の意識の向上に取り組んできた山科区自治連合会連絡協議会と他2団体（南区、西京区）に贈られました。市役所で行われた贈呈式には、区代表として山科区自治連合会連絡協議会会長会の川井均代表に市から特別感謝状が贈られました。

特別感謝状を受け取る川井代表

問合せ先　市循環企画課（☎213-4930）

はねず踊り開催　3月30日(日)

小野小町ゆかりの寺「隨心院」

小野小町と深草少将の恋物語を踊りで披露

「はねず」とは薄紅色のことをいい、小野小町ゆかりの寺、隨心院に咲く紅梅は、古くからこの名で呼ばれていました。

はねず踊りは、小野小町を恋い慕う深草少将との悲恋をわらべ歌に合わせ、薄紅色の小袖を着た少女たちが、可憐、優雅に舞う踊りです。このはねず踊りは、「伝統文化こども教室」として、文化庁の委嘱を受けた財団法人伝統文化活性化国民協会の認定事業になっています。

京に春の訪れを感じさせるはねず踊り、皆さんで出掛けられてはいかがですか。

時刻
①午前11時
②午後0時30分
③午後1時30分
④午後3時

場所　隨心院境内（雨天の場合は能の間）　小野御霊町35（地下鉄小野駅から東へ徒歩10分）

料金　大人1,000円、中学生以下800円（拝観、梅園入園料含む）

問合せ先　はねず踊り保存会（☎571-0025）

山科の新たなシンボルとなる

山科ブランド新製品を制作

地域の活性化を図るため、清水焼団地協同組合、京都伝産仏具工芸協同組合、社団法人山科経済同友会、京都商工会議所の4団体で「京都山科観光プロジェクト実行委員会」を編成し、清水焼と京仏具の伝統工芸が協働して食に関する新製品の開発を行ってきました。

新製品の盛皿とスプーン

この度、新たな山科のシンボルとなる新製品が完成しましたので紹介します。

新製品は、木製と陶磁器製で制作されたスプーン、平皿、スープ用ミニカップ等で、3月7日に東京で開催した展示会で多くの方の好評を受けました。

また、3月16日（日）には、ホテルブライトンシティ京都山科で、展示会と新製品を使った試食会が開催されます。

問合せ先　京都山科観光プロジェクト実行委員会事務局：清水焼団地協同組合（☎581-6188）

山科の古代を探る

第1回　山階寺

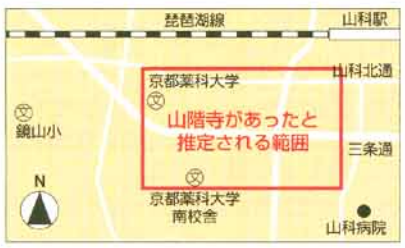
今回からシリーズで、京都大学大学院文学研究科の吉川真司准教授の執筆により、古代（飛鳥時代～平安時代）の山科における史跡について紹介します。

山階寺（やましなでら）という寺院が、古代の山科にはあった。山科寺とも書く。もし奈良時代の都人に「山科を知っていますか」と聞けば、すぐに「山階寺のことか」と問い返されただろう。なぜそれほど有名かと言うと、藤原氏の氏寺である興福寺の別名が山階寺だったからである。興福寺は藤原京から移ってきた寺院で、更にさかのぼれば山科にあった小さな寺に起源を持つ。その名前が奈良の興福寺にも受け継がれていたのである。

藤原氏の始祖である藤原鎌足は、近江大津宮の時代に「山階の陶原（すえはら）の家」という邸宅を持っていた。そこには持仏堂があり、鎌足が大化改新の成功を祈って造顕した釈迦三尊が祭られていた。これが山階寺（山階精舎）で、鎌足の葬儀もこの寺で行われた。

それでは、山階寺はどこにあったのだろうか。江戸時代以来、このことに関心を持つ人は多く、様々な説が出されてきた。現在でも山科区北部に求める説、南部の大宅廃寺や中臣遺跡に当てる説などが並び立っている。しかし、古代の文献史料を読み解いていけば、北部説がおのずと有力になってくる。具体的にはJR山科駅の南西、現在の御陵大津畑町周辺こそが、最も有力な山階寺推定地である。

最大の根拠となるのは、『安祥寺資財帳』である。古代の安祥寺（下寺）は山科駅の北にあったが、資財帳によれば、その南限は「興福寺の地」であった。安祥寺領を書き上げた古文書を見ても、同寺の南西（推定地付近）はすっぽり空白になっていて、そこが興福寺領であったと考えられる。更に興福寺側の古文書によれば、この地は「宇治荘」と称され（山科は宇治郡に含まれる）、藤原鎌足の忌日法要の財源になっていた。つまり鎌足邸と山階寺が興福寺領荘園、しかも鎌足と縁の深い荘園になっていたわけである。



山科盆地全体を描いた「山科郷古図」を見ると、山階寺推定地付近は「大槻里」と呼ばれ、西隣が「陶田里」であったことが分かる。これも「山階の陶原の家」の所在を考える上で、重要な手がかりになるだろう。なお、「陶田」や「陶原」は須恵器生産と関わりのある地名らしく、この近辺では古代の窯跡が多数見つかっている。